

# 環境学習施設の つくり方

—地域に多面的価値を創出する施設—

「環境学習施設ハンドブック」制作開始

【特別寄稿】

大阪産業大学 デザイン工学部環境理工学科 准教授

花嶋温子



はじめに

環境省は2021年の3月に「地域に多面的価値を創出する廃棄物処理施設整備の促進」というガイドラインを作成しています。図1のようなイメージで、廃棄物処理施設が資源循環だけでなく、地域の学習や産業や防災やエネルギー創出の核となるというものです。

実は、私たちが地域を元気にする「環境学習施設を考える会」を始めたのは2016年です。その後「廃棄物資源循環学会の環境学習施設研究部会」という研究組織としてのベースを確立し活動を続けています。私たちは「環境学習施設」研究部会を名乗っていますが、「環境」の枠からも「学習」の枠からも、さらには「施設」の枠からも飛びだして、廃棄物処理施設が周辺地域のみならず理解されて受け入れられ、地域に貢献する施設となるためにはどうしたらいいのかを研究してきました。そういう意味では、環境省よりも少し早くから「多面的価値の創出」に取り組み始めたことになりました。

このたび、2017年から構想していた「環境学習施設ハンドブック」の発行を実現させるべく、『月刊廃棄物』の誌面を借りて、多くの自治体や廃棄物処理施設の皆様にハンドブック制作についてお知らせし、ハンドブックづくりへのご協力を呼びかけます。

## 廃棄物処理施設に環境学習設備

近年新しく建設される公共の廃棄物処理施設には、必ずと言っていい

ほど環境学習施設や設備が設置されます。それは地域の小学校4年生が社会科で見学に来るからです。それ以前にも、廃棄物処理施設への見学はありましたが、1980年に施行された学習指導要領に「廃棄物処理が役だっていることを理解すること」と示されてから、見学が加速しました。1980年当時の小学4年生(10才)は、すでに51才となっており、日本の人口のうちのかなりの人数が小学生のときに廃棄物処理施設の見学経験があります。

厚生省(当時)は、1983年から、「リサイクルプラザ事業」として、大人向けのごみ学習事業を開始しました。1990年からは、リサイクルプラザ/リサイクルセンターへの国庫補助も始まり、大人への啓発事業の本格化もあいまって、新しく建設される廃棄物処理施設には、見学通路や環境学習設備が設置されることが当たり前になってきたのです。

## 環境学習施設から「多面的価値」へ

このような市民向け環境学習施設をもった廃棄物処理施設が、近年で

図1 環境省による廃棄物処理施設の多面的価値のイメージ



出所：環境省 <https://www.env.go.jp/recycle/tamen-gaidansu.pdf>

はさらに「多面的価値」を持つようになってきました。

廃棄物処理施設は、そもそも忌避施設でした。現在でも俯瞰すると忌避施設に含まれるでしょう。しかし、ダイオキシン対策や臭気対策などが確立されたいま、施設のイメージがわりつつあり、人が集まる地域貢献型施設も誕生してきています。

例えば、年間30万人以上の来場者があるA焼却工場には温浴施設やジムやカラオケ施設がついています。市民にとってはお風呂屋さんという認識なのか、煙突から白煙がでていても気にならないようです。ゲーム

仕立てて学べる環境学習設備や不用品交換の場も整備されています。

B 焼却工場の環境学習施設には環境学習のために年間約3万人の来場者があり、さらに出前講座も実施しています。さまざまなタイプでの環境学習がさかんな自治体において、その牽引役となっています。

C 焼却工場は市の主要施設近くに立地し交通の便もよく、自由見学が可能な見学通路が設置されているほか、マルシェなどのイベントも定期的に開催されています。ここでは、ごみピットを見ながらお酒が楽しめるバーが開設され話題になりました。

D 焼却工場には、災害時には避難所となる体育館があります。定期的に地域の人たちと行政、SPCによる防災訓練が行われていて、いざというときのために食糧や水、簡易ベッドのほか、連絡用の自動二輪車、電動チェーンソーやペット用のゲージまで備蓄されていて、本気度の高さが伝わってきます。

E バイオガス化施設は、レストランや直売所が同じ敷地内にあります。発酵後の消化液を液肥として使って育てた美味しい野菜がレストランの人気メニューです。平日でもウエイティングリストが出ているほど大人

気レストランです。施設見学プログラムには、地域での生ごみ循環の説明とレストランでの食事がセットになった五感で体験するコースもあります。

このような華々しい「多面的価値」だけではなく、派手ではないものの大切な「多面的価値」を担っている廃棄物処理施設も数多くあります。例えば、公共施設なので、お金をかけずにゆったりと安心して過ごしたい人々を受け入れています。実際に、障害をもつ方や小さな子ども連れの方々が多く訪れ、福祉施設的役割を担っている施設があります。また、さまざまな市民活動の拠点となり、地域のコミュニティの核となっている施設もあります。ここでは新しいスモールビジネスを創出するようつながりができています。単純に地域の人と人とのつながりが増えることで、ストレスを発散したり認知症の進行を抑制したりといった健康増進機能も期待できます。

廃棄物処理施設は、廃棄物を集めて処理しエネルギーや資源をつくり出すだけでなく、人と人とのつながりが創出され育まれていることも注目すべき点です。

## 環境まちづくりの核となる 環境学習施設

多面的な価値の創出の中心となるのは、廃棄物が集まりそれを適正処理して環境を守る廃棄物処理施設そのものです。しかし、その存在や意義はいまでは当たり前すぎて関心を持つてもらえません。そこで、施設の意義を伝える環境学習施設が重要となります。

公共で廃棄物を処理することを始めたときから、清掃行政、環境行政の長い道を経ていまこの地点にあり、さらにその先を目指していること。地域全体、地球全体の環境を考えると、大量消費、大量廃棄、大量処理では資源や環境が持続できないこと。だからこそ、暮らし方を変えることによって廃棄物や温室効果ガスの発生を減らさなくてはならないこと。その先の暮らしは我慢や不便を強いるものではなく、つながりや美しさといった生活の質を向上させる要素を持っていること。そのために、いま、この廃棄物が集まる場で、多くの人がいっしょに考えなければならぬということ。目標は、廃棄物の処理のその先にある豊かな暮らしであること。これらを伝えて

いくのが、廃棄物処理施設の環境学習施設です。廃棄物処理施設の多面的価値は、全てがより良い暮らしのためであり、環境学習施設が指し示す方向の先にあります。

## 環境学習施設研究部会

このように、廃棄物処理施設の環境学習施設は非常に重要な役割を担っている、あるいは担える可能性があるにも関わらず、それぞれの自治体の枠に阻まれて、施設間の協力が関係が構築されにくい状況にあります。

同じように社会教育を担う図書館や公民館や博物館には、施設どうしがつながり、協力する仕組みがあります。図書館には公益社団法人日本図書館協会、全国公共図書館協議会があり、公民館には公益社団法人全国公民館連合会が、博物館には公益財団法人日本博物館協会があります。そこで、私たち廃棄物資源循環学会環境学習施設研究部会は、環境学習施設のネットワークの形成をはかっています。

通常の物や財は他の人と共有すると自分の分が減ります。しかし、教育資源は共有しても自分の持ち分は

減りません。むしろ、共有の過程で新しい発見があり、人とプログラムは成長します。一つの施設で良かった手法が、状況の異なる他の施設で違う人によって同じように活用できるかどうかはわかりませんが、大いに参考にはなるでしょう。共有と相互承認によって、環境学習施設の価値を高め、人材を育成するためのネットワークづくりを私たちは目指しています。

## ハンドブックの制作手法

今回の「環境学習施設ハンドブック」は、このような状況のもと、環境学習施設の現場の運営に携わる方々や、環境学習施設の計画に携わる方々にご協力いただき、情報を共有することによって、全国の環境学習施設の質的向上に寄与することが目的です。

「環境学習施設ハンドブック」のサブタイトルは、「ごみ処理施設の環境学習施設からはじまるまちづくり・ひとづくり」です。環境学習施設で大切なのはそこで何を指しているかです。全国どこでも同じ施設、同じ方法ではなく、それぞれの施設

には、それぞれの背景があり歴史があり、活動のしかたがあるはずですが、ハンドブックは資料集であるだけでなく、読み物としても面白くしたいと考えており、それぞれの施設の経緯を、これまでの施設紹介とは違う角度から紹介したいと考えています。

そこで、書籍化の前に、この『月刊廃棄物』に連載させていただき、新たな情報提供を求めるという方法をとります。『月刊廃棄物』編集部のご協力により、これから1年間にわたり隔月で全国各地のユニークに頑張っている環境学習施設を誌面で紹介させていただきます。現時点では、施設の設立の背景や運営方法、注目の活動内容やそこで活躍する人々について紹介したいと考えています。環境学習施設についてどのような情報が必要とされるのか、また、全国にはどのようなプログラムがあり、人がいらつしやるのかについての情報収集も兼ねた連載です。環境学習施設研究会までお寄せください。

最終的には、これらの内容をとりまとめハンドブックという形で書籍化する予定です。また、環境学習施設研究会が実施している春と

秋の視察研修会や、廃棄物循環学会の春と秋の研究発表会での公開フォーラムなどでいただいたご意見も同様に積み上げて、ハンドブックへとつなげていきます。

## ハンドブックの内容

2019年の廃棄物資源循環学会のセミナーにおいて、「地域のための廃棄物処理施設・環境学習施設」はどんなものが望ましいかというワークショップを実施しました。結果は多岐にわたりましたが、それをまとめたものが、図2のマップです（※1）。

環境学習施設が実施している「ごみ処理工場から学ぶ」「体験・実践から学ぶ」「情報の発信・収集」という3つの分野に分け、それぞれに関する「ヒト（人材）」と「モノ（設備）」と「コト（プログラム）」という分類で整理しました。この整理の方法を、今回のハンドブックでもそのまま採用する予定です。

## すべての施設はただ一つのオリジナル

ハンドブックが完成しても、そこ

にそれぞれの地域の環境学習施設の答えがあるわけではありません。ハンドブックは、全体像を明らかにし、何をどう考えたいのかを整理するものです。日常のプログラムレベルでは、そのまま活用できる部分もあるかもしれませんが、環境学習施設にどのような特長をもたせ、どのような組織でどのような人材を育てていくのかは、それぞれの地域の背景によって異なるはずですから、すべての環境学習施設は世界でただ一つのオリジナルな施設です。

そして、すべての廃棄物処理施設の環境学習施設は、これからの環境を考え、暮らしを豊かに変えるための価値ある場所です。もつと良くするために、ハンドブックづくりに是非お力添えください。W

※1 川崎重工業株の山口茂子氏が、みなさんで話し合った結果をイラスト入りポスターにまとめてくださいました。

### ●連絡先● 環境学習施設研究会

「環境学習施設研究会」で検索すると、(一社)廃棄物資源循環学会環境学習施設研究会のページがでてきます。同部会がfacebookの「環境学習施設を考える会」も運営しています。

